東京家族

原案 山田洋次 平松恵美子
作 白石まみ

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

東京家族

原案 山田洋次 | 平松恵美子

作 白石まみ

講談社

東京家族（とうきょうかぞく）
原案 山田洋次（やまだようじ）｜平松恵美子（ひらまつえみこ）
作 白石まみ（しらいし）
© Yoji Yamada 2012 © Emiko Hiramatsu 2012
© Mami Shiraishi 2012
© 2013 "Tokyo Family" Film Partners

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2012年12月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
販売部（03）5395-5817
業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———凸版印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277453-6

講談社文庫

東京家族

原案 山田洋次｜平松恵美子
作 白石まみ

講談社

本作は、小津安二郎監督作品「東京物語」にオマージュを捧げた
映画「東京家族」（監督・山田洋次、脚本・山田洋次、平松恵美子）を原案として、
著者が小説化した作品です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東京家族

1

柔らかな日差しの下、菜の花が風になびいて小さく揺れている。
澄み切った青空と白い雲、菜の花の黄色というくっきりとした対比が、東京都下の少しのんびりした時間に、ほどよい刺激を与えている。
四月の初めにあちらこちらで見られた桜は、すっかり散ってしまった。
そのかわりに、多摩丘陵の住宅地にはイエローグリーンの爽やかさが際立つ若葉の季節が訪れようとしている。高い建物もなく、家と家との間隔も広く、ゆったりとした雰囲気が漂い、住宅街の中に取り残されたように点在している畑も、新芽を出し、きらきらと輝いていた。
その脇を私鉄の電車が音を立てて行き交う。ガタンゴトンという微かに身体に響いてくる音も、この街の風景の一部となっている。
青空に向かって伸びている高圧線の鉄塔、子どもたちの笑い声、私鉄の駅から続い

ているゆるやかな長い上り坂は、そんなのどかな雰囲気にしっくりとなじみ、溶け込んでいるようだ。

平山幸一（ひらやまこういち）が院長をしている平山医院はそんな住宅街の中にあった。自宅と病院を兼ねている二階建てのこぢんまりした白い建物である。

二〇〇三年に建てた頃は、明るくモダンな印象があった。しかし、十年が経過しようとしている今となっては、ほどよく日差しを浴びたベランダの二組の布団までも、その一部になってしまうほどの時間的な変化を感じるようになった。

平山家の二階では、幸一の妻の文子（ふみこ）が客用の二組の布団をベランダから取り込んでいた。飾り気のないからし色のカットソーに茶色のロングスカート、医者の妻というイメージからは少し離れてはいるものの、カットソーと同系色のエプロンで品よくまとめている。

ベランダから続く六畳ほどの和室は、中学二年生の長男、実（みのる）の部屋だ。

好きなアイドルグループや野球選手のポスターが壁のそこかしこに貼られ、応援グッズ、プラモデルの箱などが部屋の隅に積み重なっている。本棚にはもうほとんど目

にしなくなった百科事典なども揃(そろ)っていた。
文子はそれらを見栄え良く片付け、勉強机を隣の部屋に移動させた。脇目もふらずに片付けているのは、今日、幸一の両親が数年ぶりに田舎から出てくるからである。
めったにないことだけに、文子は片付け一つとっても、細部にまで気を配る。
「もう散らかしちゃ駄目よ」
リモコンのヘリコプターで遊んでいる小学四年生の次男、勇(いさむ)に声をかける。
しかし、最近、反抗期なのか返答はない。かといって、それを勇に要求するだけの時間的な余裕もなかった。
文子は小さくため息をつくと、掃除機を持って部屋を出た。

文子が階段を降りていくと、ちょうど玄関のドアが開いて長男の実が中学校から帰ってきた。
「ただいま」
「おかえり」
実は靴を脱ぐのももどかしく、文子に尋ねた。
「おじいちゃんおばあちゃん、まだ？」

「今、何時？」

文子は掃除機を棚に片付けると、居間を覗き込んで壁時計を確認した。

「ちょうど品川駅に着いた頃じゃないかしら」

文子は言ったが、質問した当の実は返事もせず、つまらなそうに階段を上がっていった。

実が二階に上がると、勇がだらしなく寝そべりながら、ヘリコプターで遊んでいた。

「兄弟でくだらない小突き合いをするんじゃありません」という、いつもの文子の言葉が頭をよぎったが、構わず勇を無言で蹴飛ばした。自分の前にいるとついちょっかいを出したくなってしまうのだ。

「何だよ、みのむし」

みのむしというのは、実の「みの」の部分を取ってつけたあだ名である。攻撃された勇は実に向かって、思いっきり意地悪い顔をして見せた。

しかし、実は勇の反応など意に介さず、すっかり片付けられ、様相の違った自分の部屋を呆然と眺め、立ち尽くした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

階段を駆け降りた実は、居間で忙しそうに片付け物をしている文子に抗議の目を向けた。
「ママ！」
「何？」
文子は、仕事の手を休めずに返事だけをした。
実は不満そうな表情を隠そうともせずに続ける。
「何でぼくの勉強机、勇の部屋に入れちゃうんだよ」
「しょうがないでしょ？　あんたの部屋にはおじいちゃんたちがお泊まりになるんだから」
「え、家に泊まるの？　ホテルに泊まりゃいいじゃないか」
家に来るだけではないことに驚いた実は、迷惑そうに口をとがらせる。
そんな実の言葉を聞いて、文子は初めて実の顔をきちんと見た。そして、言い聞かせるように言った。
「そんな言い方するもんじゃないの。おじいちゃんやおばあちゃんは孫のあんたたちと二日でも三日でも一緒に過ごしたいのよ」

言い終えると、実の不平には構わず、食卓の上を片付け始めた。
それでも実はなおも文子にくいつく。
「じゃあぼく、どこで勉強すりゃいいんだ」
文子はお盆を持って台所に行きながら、「勇の部屋ですればいいでしょ」と、まるで取り合わない。
しかし、実は洗い物に取りかかった文子に言いつのる。
「できないよ、あんなうるさいやつと一緒じゃ」
「何言ってるの、勉強なんかろくにしないくせに」
生意気なことなど言うなというようにぴしゃりと言い捨てる。いちいちつっかかってくる実の相手をしている時間など、今はないのだ。
「あ、そう。じゃ、勉強しなくたっていいんだね。赤点取ってもいいんですね。ラッキー！」
その「ラッキー」の言い方がいまいましく、文子は「こら！」と声を上げた。
しかし、言いたいことだけ言った実は廊下をすべるように走って階段へ向かうと、二階へ上がってしまった。

なだらかな坂の上に位置する平山医院は、玄関に辿りつくまでに十段ほどの階段がある。

個性的なチェックのワンピースにパンプス姿の金井滋子は、はぁはぁと息を切らして、手すりにつかまりながらそれを上ってきた。

「よいしょ」

掛け声をかけ、最後の一段を上りきる。

「こんにちは！」

平山家の自宅の方の玄関を開け、滋子が大きな声を出すと、洗い物の手を止め、ふきんで手を拭いた文子が暖簾を持ちあげ、玄関の方を覗いた。

「あらお義姉さん、いらっしゃい」

文子は滋子をいつも「お義姉さん」と呼ぶ。しかし、滋子は幸一の妹だし、文子は滋子と同い年でもある。本来ならば、「滋子さん」とか「滋ちゃん」などと呼んでもおかしくはないだろうが、ほんの数ヵ月でも滋子の方が早く生まれたという事実に加え、彼女の凛とした雰囲気が「お義姉さん」と自然に呼ばせた。

「昌次から電話あった？」

「いいえ、まだ」
「変ね。新幹線が遅れさえしなければとっくに品川に降りてる頃よ、お父さんたち」
滋子は勝手にスリッパを出すと、せかせかと上がり込んだ。
「そうね」
言いながら台所に戻る文子のあとについて、滋子は居間に入った。
文子がお茶の準備を始めると、滋子は自分の持ってきたバッグや紙袋を食卓の上に、どさりと置いた。
「ああ、疲れた」
「歩いてらしたの」
「そうよ。年取ったら大変ね、この家は。坂道上がったり下りたり。今のうちはまだいいけどさ」
まだ暑い季節ではないのに、長い上り坂を歩いてきたせいなのか汗が止まらない。滋子はハンカチでパタパタと仰ぎながら、部屋の中を見回した。赤色のセルフレームの眼鏡の奥で、細かに家具や飾り物のチェックをするのが、この家に来た時の習慣になってしまっている。
結婚してから十五年以上、文子はそんなことには慣れっこになっている。彼女のサ

バサバとした性格をわかっているから、すんなり流せるのだ。
文子は滋子の皮肉ともとれるような言葉には触れず、台所から出て来るなり、「お義姉さん、今夜すき焼きにしたけどいいかしら」と、両親を迎えるにあたり失礼がないかどうかを尋ねた。
「ああ上等よ、二人ともお肉大好きだし」
その言葉に文子はようやく笑顔を見せる。
「はいこれ、いつものよもぎ餅」
「どうもすみません」
滋子から紙袋を渡された文子は恭しくそれを受け取ると、滋子の向かい側の椅子に座った。
「ねえ、昌次さんが自分で言い出したの？　お義父（とう）さんたち迎えに行くって」
文子は、いつもの昌次の態度から考えてそんなことを言い出したのが不思議でならない。
「私。たまには親孝行の真似事（まねごと）くらいしなさいって言ったのよ。いつも心配ばかりかけてるんだから」
「やっぱり」と文子が思わず吹きだすと、滋子もやれやれというように苦笑した。

昌次というのは、幸一と滋子の弟にあたる。十八歳の時に広島の実家を飛びだし、東京に出てから、もう十年以上、職を転々としている。東京に住む幸一や滋子とは時々会ってはいるが、実家にはまったく帰っていないと文子は聞いていた。

居間の隅に置かれた電話が鳴った。

「昌次かな」

滋子はすぐに立ちあがると、まるで自分の家の電話のように受話器をとった。

「はい、平山です――あ、昌次。どうした、お父さんたち」

予想通りだったというように滋子が笑顔を向けてきたので、文子は笑顔を返すと、もらったばかりのよもぎ餅の紙袋を開け始めた。

「ええっ？　見つからない？」

滋子のすっとんきょうな声に文子は顔を上げ、彼女を注視する。

「だってとっくに着いてるでしょ、新幹線――」

そこまで言って、滋子はハッと気付き、声を上げた。

「ちょっと今あんたどこにいるの？　東京駅？　馬鹿ね、お父さんたち品川駅に降りるのよ。私、そう言ったじゃない。何聞いてるの？　相変わらずぼんやりね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com